『國民新報』1940年2月18日

[主張]　仁愛と忠厚

　紀二千六百年のにり、が一のはくも、ありがたきをした。にのりである。

　の宏謨とをびりてのにひはせ、がのをけいでのにいることをしたまうたこととする。

　にきてのをらず、にりてをせず。にかあらんとふはのであらうが、それはのではないだ。がるもの、くるも、しむもて、のにまします。の、、、等、すべてにつて生きむところのもののにあらずしてなんぞ。のとはのである、よりにるまで、々々、々々、々々、はののにししてるのである。もの四の一としてのをへたまうた。をてとなすとは、のにじることからまるものである。

　はをてをみたまひしろしめす。かゝるのにしりはをてへまつりいまつるのである。

　さてのはのひるでなくてはならぬ。とはににしたてまつるだけではない。すべてなるものはをてにみなるものはをてにへよとふかとする。、、、、、、すべて、のにつてるのであるが、それらのにいて、とのをてするのが、にいたてまつるかとんでふのである。

　このありがたきはくも、々にはつたものとすべきである。さればにのありや、のありや、の宏謨ととびたてまつるや、のを切くるはがめなりとのありやを々にするのが、をするのであるとふ。

　かくしれば、々はたるものあるにくことゝふ。のがしてるのではないだらうか。はにいて、はや、やにいて、もつともつとのをしなければならぬとふ。米、、々ののにしてをせられ、にひらむことをつた。これはち々につてなされたことであるが、に・・にいて、のをなしてにひたてまつることをすべきである。